

Op.21

遁走曲（小フーガ）

小高い山の 霊の園
並び立つ 桜の老木

あの
路上に転がる セミの黙身^{だまりみ}

陽光宿す 基石の標本
安置される 無数の舍利

あの
路上で動かぬ ミミズの変色

ゆらりゆらめく 線の香り
ゆらりゆらめく 菊の花

あの

路上に墮ちる ミツバチの使命

小高い山の 霊の園

並び立つ 緑の老兵

あれら

土に還れぬ 些細な抜け殻

陽光宿す 墓石の敬礼

放置される 歴戦の舍利

あれら

土に還らぬ 冷めた舍利壺

花散って 進む季節
黒いレースに 透ける夏

Op.22

過ぎゆく夏

残る暑さの鼻息荒く
剥き出しの光の棘

残る暑さにセミ鳴き止んで
取り返される夏の風音

白黒まだらのクジラ
海面滑って風の波

乾いた鐘の音 踏切に
右に 左に 流れ 消え

寝坊のセミの慌てて鳴いて
時間のずれ 季節の名残り

逆さの海に重なる^{うすきいろ}薄黄色
古いアルバム 褪せた写真

Op.23

黒い散歩者

夜の藍に誇る薄紫
うすむらさき
夜の雲に遮られる夏の星

等間隔に 街の灯り 灯り

路上を這う黒い散歩者
薄明かりから 薄明かり
薄明かりから 薄明かり

エントランスの明るい電灯
ドローンの昆虫 天井へ 天井へ

無意識に 蹴り出される脚 脚

光の中へ 光の中へ

黒い散歩者と　しばしの別れ

Op.24

雲丹

まるいのに まるくない
暗くて黒い 海の底

赤に 青に 黄に 白に
明滅する雲丹の そこかしこ

ぬるい水
冷たく光る雲丹の棘

冷えた水
暖かに光る雲丹の棘

まるいのに まるくない
暗くて黒い 海の底

前に 左に 後に 右に

もがく肢体の そこかしこ

ぬるい水

冷たく光る雲丹の棘

冷えた水

暖かに光る雲丹の棘

まるくないのに まあるい

暗くて 黒い海の向こう

赤に 青に 黄に 白に

明滅する雲丹の そこかしこ

冷たそうな水

冷たそうに光る雲丹の棘

まるくないのに まあるい

明るくて 白い海の中

赤に 青に 黄に 白に
明滅する雲丹の 夢と消え

Op.25

信徒

動かぬ影に沈む夜の公園

曲がりくねった背々中で
左右に広げた両の腕^{うでうで}々を支え
その格好でお前たちは止まっている

時を忘れたかの夜の公園

曲がりくねった背^{せせなか}々中で
左右に広げた両の腕々を支え
その格好でお前たちは固まっている

灰色の雲に隠れた夜の庭園

曲がりくねった背々中で
左右に広げた両の腕々を支え
その格好でお前たちは待ち続ける

灰色の雲に透ける夜の庭園

曲がりくねった背々中で
左右に広げた両の腕々を支え
その格好でお前たちは祈り続ける

月と星々の奏でる音のない共演^{シンフォニ}

Op.26

再会

夕空に赤く共鳴するうなり
やがて黄^{きむらさき}紫に閃光垂れ落ちる

電車に揺られ画^えのない夢
一日という舞台からの退場

黒く塗り潰された地面
湿って粘る両の靴裏

ひしゃげた黒い銀杏の葉
垂れ落とす世界の事実

耳の中 眠気を覚ます

黒鍵 黒鍵 黒鍵

頭の中 紛れて消える

黒鍵 黒鍵 黒鍵

おとなしい歌劇の楽団
どこか近くの 秋の虫たち

黒い影に 影呼び戻す

白鍵 白鍵 白鍵

黒い地面に 影引き出す

白鍵 白鍵 白鍵

足元でくり返されてきた
つかの間の再会 その旋律

Op.27

夏から秋へ

耳横を通り過ぎる乾いた風

夜通し奏でる秋虫の羽
目醒めた朝日に溶ける余韻

耳横を通り過ぎる生ぬるい風

暑さのみ残った夏の正夢
最期までたぎらせるセミの熱情

耳横を通り過ぎる冷めた風

路上に潰れた身重のカマキリ
世界に触れぬままの生命の米粒

耳横を通り過ぎる乾いた風

草葉の揺れて夜のざわめき
油の切れた換気扇の音

Op.28

秋雨

頭上の傘に秋の雨粒

水底透ける名ばかりの川
水かさ増して あふれる真実

頭上の傘に秋の雨粒

地の下流れる隠密の川
水かさ増して 流れる轟音

頭上の傘に秋の雨粒

アスファルトに生きた花
褪せた花びら 滲む水彩の赤

頭上の傘に秋の雨粒

濡れ垂れ下がる銀杏の葉々
路上との接吻 急かされる悲恋

頭上の傘に秋の雨粒

古の賢者の箴言
「万物の根源は水である」

Op.29

墓地

住宅街の墓の街

家々の墓銘 歴史の題名

家々の墓標 歴史の血脈

住宅街の墓の家

伸びた雑草 風に揺れ

古い卒塔婆 風に揺れ

住宅街の墓の上

白日の残像 赤く冷え

みみなか
耳中の記憶 ツクツクボウシ

住宅街の墓の外

疎らな足音 隣の静けさ
車両の通行 流れる精霊